



鑄劍 作 鳥屋 田澤

落ちた。つづけて彼は声の棒でもって鼠の頭を何度も小突いて、それを素早く沈めてしまった。六回、松明をとりかえた後、鼠はもう動かなくなつた。だが水の中に沈みながらも、時々また水面に向つてちよつと跳びあがるうとする。眉間尺はまた可哀そうな気がして、すぐ声の棒を二つに折り、手間をかけてどうにか鼠を挟んで取り出して、地面においた。鼠ははじめちよつとも動かなかつたが、やがてちよつと少し呼吸をした。それからまた大分たつて、四つの脚をバタバタ動かし、ふと身をひるがえしたかと思つと、起き上つて逃げ出そうとするようだ。それは眉間尺を吃驚させ、思わず左脚をあげて、イキナリ踏みつぶした。チヌーという声が出たので、彼は躊躇んでよく見ると、口ばたに微かに真赤な血が出ていた、多分死んでしまつたのだろう。

彼はまたひどく可哀そうな気がした。何だか自分が大悪事でも犯したように思われて、とても堪え難い気持ちであつた。彼は躊躇んだまま、気抜けしたように見まもつて、立ち上らぬ。「尺や、お前何をしているのだね？」と彼の母親はもう眼をさまして、寝台の上からたずねた。「鼠が……」と彼はあわてて立ち上ると、身体をねじ向けて、ただそれだけ答えた。「そうさ、鼠のことは分つている。だがお前は何をしているのだね。それを殺しているのか、それとも助けているのか？」

彼は返事をしなかつた。松明はもう燃えつくしてしまつた。彼は黙つたまま暗がりの中に立っていたが、やがて、月光のきれいにかがやいているのを見た。

「いい意味だ！」彼は毎夜、毎夜、家具類を噛り、さわがしくて安眠もできないのはこいつらの仕業だと思つと、とても気持ちが悪くスウーとした。彼は松明を土壁の小さな穴に挿しこんで、見物してゐた。そうするとそのつづらな小さい眼が、彼に憎しみを起させた、手を伸ばして一本の声(おこい)を抜き出すと、鼠を水の底へグイと押し沈めた。しばらくたつて、手をゆるめると、鼠は同時にまた浮び上つてきて、やっぱり蹠の内側をひっつきながらぐるぐる廻つた。だがひっつき方には前ほどの力はなく、眼も水の中につきり、ただ尖つた真赤な小さい鼻先だけをポツンと出して、チヌーチヌーと気ぜわしく途切れがちに呼吸した。

彼は近ごろあまり赤い鼻の人間を好まないふうがあつた。だがいまその尖つた小さな赤い鼻をみると、ふと可哀そうな気がして、すぐにまたその声の棒を、鼠の腹の下まで差し込んでやつた。鼠はひっつきながら、ウンと力を出して、声の棒を伝つて匍匐上つた。彼は鼠が全身濡れてべとべとになつた黒い毛、大きな腹、蚯蚓みづぢのような尻尾——をあらわにしたところを見ると、また腹立たしく憎らしさを覚えて、急に声の棒を一ふりすると、ポトンと音がして、鼠はまた水蹠の中に剣をいれた箱をわたしの膝の上においた。『これは雄剣だ』と父はいつた、『お前これをしまつておけ。明日、わしはこの雌剣だけを大王のところへ持つて行く。もしわしが行つたまま歸つてこなかつたならば、わしはきつともうこの世にはいないのだ。お前は身こもつてもう五、六か月になるではないか、悲しむことはない、子供が産まれたら大切に育てるのだ。成人になつたときに、お前は子供にこの雄剣を手渡して、大王の首を斬らせ、わしのために仇を討たせるのだ！』と

「その日、父は歸つてこなかつたのですか？」と眉間尺はせき込んでたずねた。「歸つてこなかつた！」と母親は冷静にいつた、「わたしはあちこち聞いて廻つたが、まるで消息はなかつた。後に人からきいたところでは、お前の父のつくつた剣に、最初に血を飲ませたのは、つまりその人自身——お前の父親であつた。そして父親の幽魂が祟りをするのを怕れて、その胴体と首とを別々に、門前と裏庭に埋めたということだ！」

眉間尺は突然、全身が猛火に焼かれるようで、自分でも毛髪の本一本本からまるで火の玉がきらめき出すような気がした。彼の二つの握りこぶしは、暗がりの中でガクガクと鳴りひびいた。

母親は立ち上つて、寝台のところの木板を取りはずし、寝台を下りて、松明をつけ、裏口に行つて鋤をとつてきて、それを眉間尺に渡していつた、「掘つてごらん！」

眉間尺は心臓がドキドキした。だが落ちついて一鋤一鋤しずかに掘つて行つた。出てくるものはみな黄土であつたが、およそ五尺ばかりも深く掘つて行くと、土の色が少しちがってきた、ポロボ

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」















